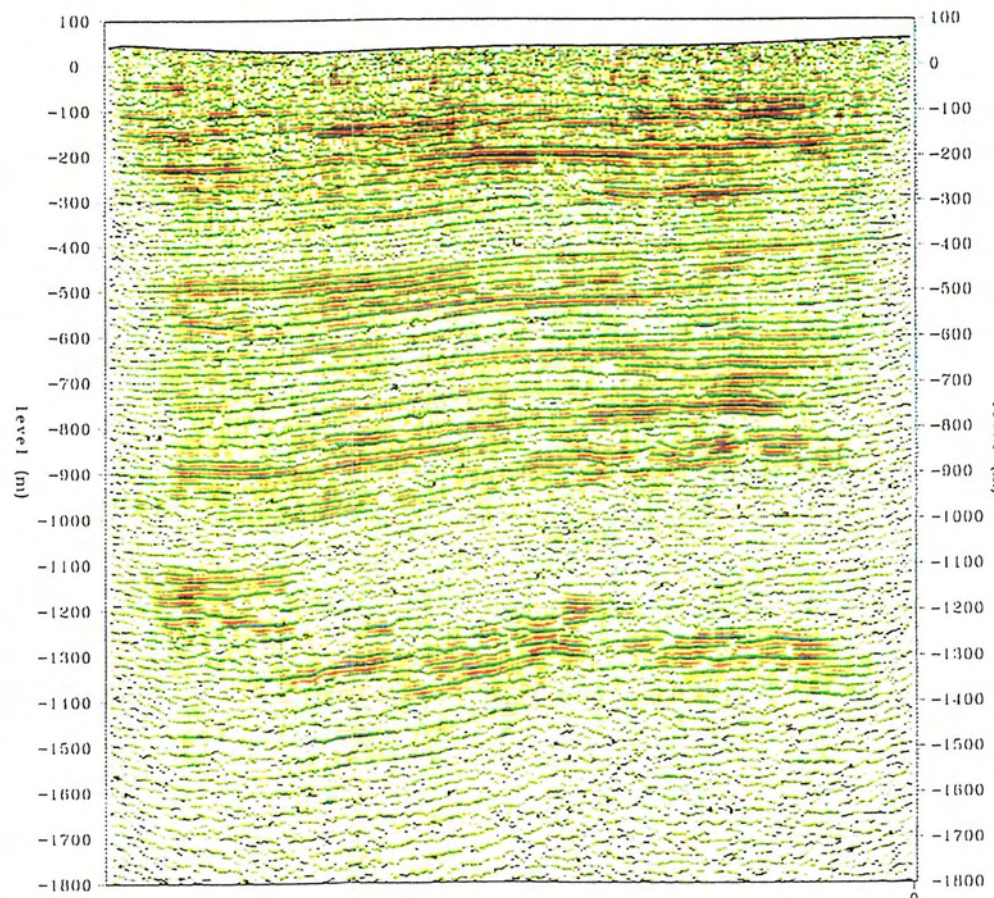


解釈

- ◆深度で約1300~1400mに比較的強い反射面が見られており、既存の反射法探査結果等から上総層群までの構造は把握し得ると考えられる。
- ◆No. 1測線のCMP750番付近に緩やかなたわみがあり、北に向かって落差が見られる。
- ◆たわみの落差は、浅くなるほど小さくなる傾向が見られる。
- ◆平成12年度に実施された反射法探査結果の反射面とは比較的よい対応を示す。
- ◆500~1400m付近に見られる反射面のたわみの落差は、平成12年度測線に比べてやや少ない。
- ◆以上から、たわみの運動に活動性があると考えられるが、東に向かうにしたがいその活動性が小さい可能性がある。



1325m → 上総層群

図-8 既存測線との比較

上：平成12年度横浜市
下：平成13年度No. 1測線

平成 13 年度
第 3 回 横浜市地下段差構造委員会資料
(総合解析中間報告 2)

平成 14 年 2 月 25 日

横浜市総務部災害対策室

1. 総合解析業務の第3回委員会報告内容

- ①既存ボーリングデータによる離水面調査中間報告
- ②地形図・空中写真による地形面判読中間報告
- ③資料調査の中間まとめ
- ④探査測線沿いの露頭状況、ボーリング候補地について

2. 既存ボーリングデータによる離水面調査中間報告

2-1. 収集した既存ボーリングデータベース

- ・「2000年版横浜市ボーリングデータ検索システム」(平成12年、横浜市下水道局)
- ・「横浜市北部地域地質データ」(横浜市総務局災害対策室、地震計設置地点のボーリングデータ)
- ・「横浜市地盤図集」(平成8年3月、横浜市)および横浜市環境科学研究所が所有する基データ
- ・「川崎市地質図集Ⅲ」(昭和53年3月、川崎市公害局)

2-2. 離水面

調査の多摩丘陵や下末吉台地は、下部に海成の堆積層があり、この上を多摩ロームや下末吉ロームが被覆している。

横浜市内の多摩丘陵は多摩Ⅱ面に相当し、海進で、海が上総層を削り込んだ上側に、おし沼層と呼ばれる礫混じりの砂層が分布している。また、下末吉台地では同じように海が上総層を削り込みこの上位に下末吉層と呼ばれる海成堆積物層が分布している。下末吉層は基底に礫層、中部に砂層、上部に粘土層が分布するとされている。

本調査では、ボーリングデータベースの記載から、おし沼層および下末吉層の記載があるものについてそれぞれの出現標高を調査した。

2-3. 使用した柱状図の選定方法

- ①「1/25000 地質図幅 東京西南部」の多摩丘陵と下末吉台地の分布範囲を地形図上で把握し、ボーリングの位置が多摩丘陵および下末吉台地に該当するものを抽出した。
- ②上記①の中から、孔口標高等必要事項が記載されていないものを棄却した。
- ③さらに、上記②で選別されたボーリングの柱状図の記載事項みて、目的とするおし沼層、下末吉層に相当すると考えられる地層が現れているボーリングを抽出した。

以上の手順で抽出し、今回の解析に使用したボーリング本数は以下のとおり

表 2-1 採用したボーリングの本数

資料名	多摩丘陵部	下末吉台地部
2000年版横浜市ボーリングデータ検索システム	13	14
横浜市北部地域地質データ	1	0
横浜市地盤図集、環境科学研究所データ	3	2
川崎市地質図集Ⅲ	20	27

2-4. ボーリングデータベース調査結果

(1) コンターマップ

平面図にボーリングの位置とおし沼層、下末吉層の出現標高を記載示した。また、これに基づいて、おし沼層と下末吉層の出現標高のコンターマップを作成したものを図 2-1 に示す。コンターマップには平成11年度、平成12年度に実施した反射法探査結果から予想される撓曲帯の位置を示している。コンターマップに現れている特徴を以下に示す。

- ・調査地北部では、おし沼層は大局的には北西が高く、南東方向に約0.3度で傾斜している。
- ・同様に下末吉層も調査地北部では北西が高く、南東方向に約0.2度で傾斜している。
- ・おし沼層、下末吉層ともに撓曲帯が延長すると思われるところで傾斜方向が東側になり、撓曲帯の南側では尾根状の高まりを示す。

(2) 断面図

コンターマップをもとに多摩丘陵部と下末吉台地部それぞれについて、南北方向の断面図を作成して、図 2-2 および図 2-3 に示す。

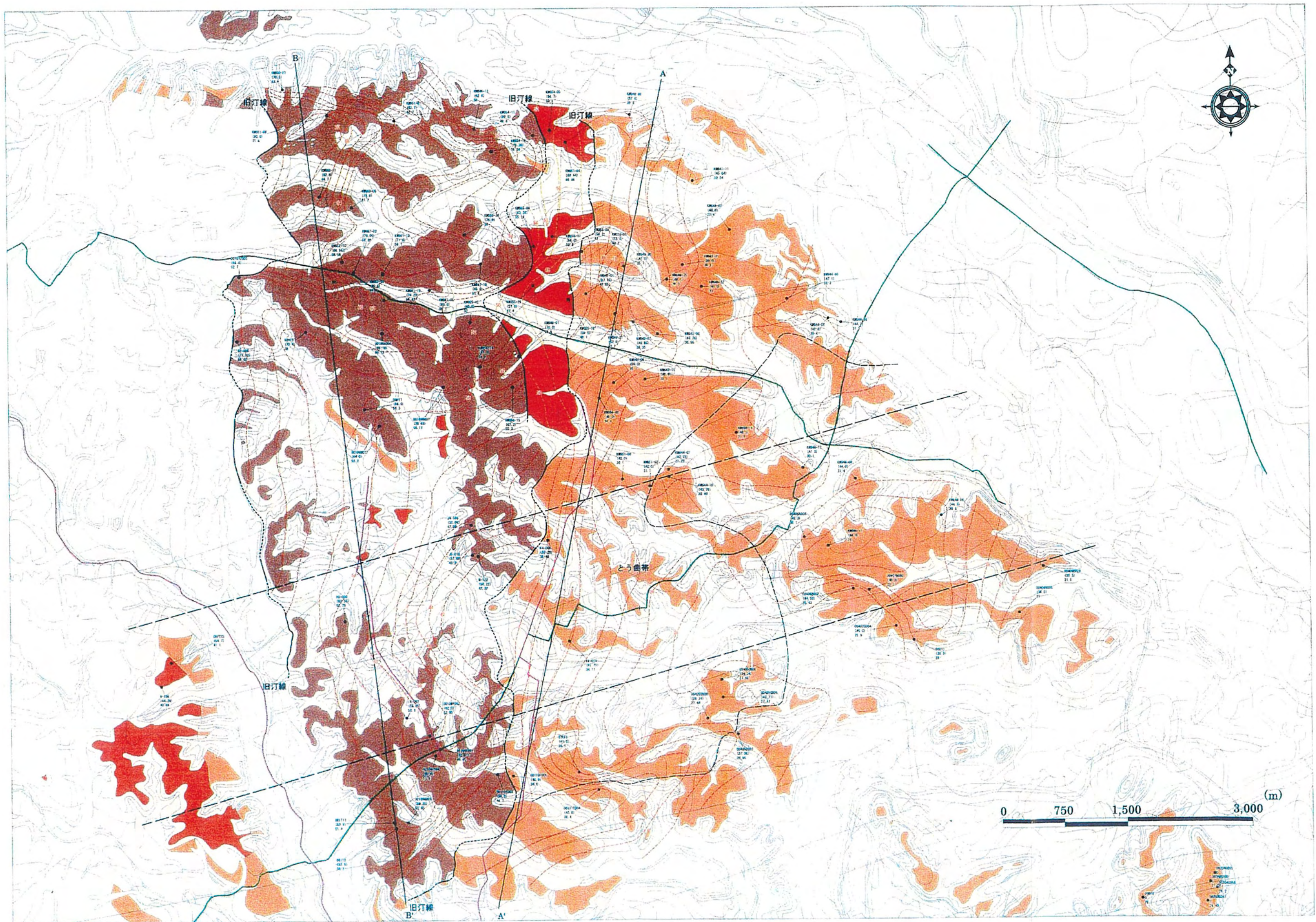


図2-1 ポーリングデータベースから引用したポーリング位置および下末吉層、おし沼層の出現標高とコンターマップ